

## 総会の報告など

### I 総会の議事

会員出席者13名及び委任状数56名で総会成立。

①経理関係議事 監事二名が確認の平成24年度の収支決算書、25年度収支報告書及び26年度収支予算書案の提示・説明があり、了承された。

②平成26年1月から2年間の新役員体制については、これまでの役員の継続及び、吉濱理事の常務理事昇任、畠山理事の新任を含む役員案の承認がなされた。

(役員の実体名については、別添を参照)

以上が異議なく、了承、承認されましたので、今後ともよろしくお願ひいたします。

### II 講演

会員外出席者2名などがあつた。

系図史料の収集やその使い方などを含めて、意義深い講演でしたが、出席者が少なかったのが惜まれます。来年度は、開催日を考慮する必要があるかもしれません。この辺は、来年になったら、またお尋ねしたいとも考えています。

#### <講演資料>

#### 史料編纂と佐々木六角氏研究

2013.11.02 村井祐樹

はじめに

#### ①『大日本史料』とは

年表

材料集め・・・1880年頃から

(主に戦前) 影写本・謄写本

↓

(戦後) マイクロ写真

↓

(近年) デジタル写真

全国探訪

#### ②佐々木六角氏研究

1922年 『近江蒲生郡志』

1970～80年代 個別論文 (『六角氏式目』・惣村)

2009年 『戦国遺文 佐々木六角氏編』

2012年 『戦国大名佐々木六角氏の基礎研究』→記録編

ex ・家臣の人名比定  
・個別の動向 …… 伊庭氏（守護代＝家宰）の乱の位置づけ

↓

まだまだ新史料が発見される可能性！

おわりに

古文書・古記録の威力

<講演要旨など> 時間は概ね 15:30～16:45（質疑応答を含む）

○進め方は、上記レジメを踏まえて、適宜、関係の図・写真（東大史料編纂所の内部、史料探訪のやり方、『大日本史料』の展示と記事、佐々木六角氏関係史料と著書のうちの関係記事、取手の宇都宮氏系図など）を投射した画面で説明された。

講演内容は、

○いま助教として、『大日本史料』のうち秀吉関係の年代部分（本能寺の変 1582～1603年までの約20年）を担当とのこと。

○大日本史料は、1880年頃からその編纂事業が始まり、1901年に第1冊目が刊行され、現在まで刊行が続けられている事情の説明。原本を借りてきて謄写する方法→マイクロ写真→デジタル写真と、史料保存法が変わったが、当初の謄写を行う専門家がまだ一人いること、現在は撮影で探訪作業自体は楽になったが、史料の長期保存のやり方について考慮中とのこと。探訪は、三人ほどで行って器財を持ち込み、史料撮影する。

○佐々木六角氏の研究は、これまであまり本格的なものがなかったが、『近江蒲生郡志』を嚆矢とする。これ以降もめばしいものがなく、採集した史料などを基に2009年に『戦国遺文 佐々木六角氏編』を出版した。これらを踏まえて、次ぎに『戦国大名佐々木六角氏の基礎研究』を出し、記録編も付けた。

○史料整理をしてみると、具体的に気づいてくることがある。例えば、

①関係文書によく見える名に「高雄」という者があり、これまで重臣の後藤氏とみられてきたが、多くの史料を照合した結果、池田氏とするのが妥当だと分かった。子供に景雄という者も見える。また、「忠行」なる者についても誤解があり、「能登右馬允」と分かった。→この辺は、著書『戦国大名佐々木六角氏の基礎研究』の「家臣の人名比定」の項の記事にもある。

②個別の動向についても見直しの点もあり、六角氏が守護権力を確立させたという「伊庭氏（守護代＝家宰）の乱」の位置づけについても、別の史料が見つかり、それによると、家臣の伊庭氏と馬淵氏の争いが最初にあつて、そのなかで、守護六角氏は馬淵氏に加担したと理解される、との説明がなされた。

今後、新史料が発見される可能性がまだあり、それに応じての見直しが必要。

○系図史料についていえば、最近、採訪に行った取手で、新しい宇都宮氏の系図が在ったとして、写真を提示しつつ説明。各種史料に照らして信頼性が高そうだとのこと。

※提示写真を見る限り、支族の上三川氏の系統か？

応答などでは、

○講演のなかで出た池田氏や後藤氏の先祖の系図が分かるか？ → A：具体的な系譜は不明も、池田氏については甲賀の縁が深そうだ。守護の六角氏も足利将軍から討伐を受けて甲賀に逃れている。→ Q：先生の著書からも、池田氏は甲賀の縁由があつて、あるいは甲賀に進出した蒲生一族ではないか、後藤氏については、佐々木一族で後藤氏の養子となつて後藤を名乗っている者が系図に見えるが、具体的な関連はわからない。その辺の事情が分かったら、よろしくご教示を。

○六角氏の政治的位置づけは？ → 講演のときの説明や回答：近江という地理的位置などからも重要な役割をはたしたが、支族の京極氏が南北朝期に有名な道誉入道がでて、勢力を伸ばし、その蔭に隠れているきらいがある。六角氏のほうでは、家督者が早死になどして振るわない面もあつた。総合的に考えて、もっと重視されるべきであり、信長上洛にあたって一蹴されただけの存在ではない。

(以上。文責：宝賀)

#### 〔追記〕

参加できなかった方から、講演資料や講演状況を知りたいという声もありました。吉濱氏が講演の録音をとっていたとのことですが、どのような形でお示しできるのか不明であり、ご関心の方は吉濱氏に直接、連絡をとられてはいかがでしょうか。